

機関番号：25406

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2008 年度 ～ 2010 年度

課題番号：20530521

研究課題名（和文）

障害者ソーシャルワークの理論と実践方法の再構築に向けた障害領域別の比較研究

研究課題名（英文）Comparative study according to the type of impairment for the reconstruction of the theory and the practice about social work with disabled people

研究代表者

横須賀 俊司（YOKOSUKA SHUNJI）

県立広島大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：60304193

研究成果の概要（和文）：障害者ソーシャルワークを実践していくには、まず、今のソーシャルワーカーが自分自身を自己変革していく必要がある。その次に、ソーシャルワーク理論における現在の到達点である交互作用モデルを拠り所にししながら、人と環境という二元論的とらえ方を改め、人と環境を一元論的にとらえていくことが求められる。そのために、障害者の身体を交互作用が生じる場としてとらえていかなければならない。さらに、これまでとは異なるオルタナティブな障害者ソーシャルワーク専門職を実現するために、科学化・アカデミックな理論を必ずしも求めるのではなく、障害者の経験知に基づく活動を支えていき、ソーシャルワーカー自身が相対化できる視点や知識を形成していかなければならないのである。

研究成果の概要（英文）：At first it is necessary for the present social workers to revolutionize themselves by themselves to practice social work with disabled people. Next, they will base on the transactional model that is theoretical goal in social work theory while constructing the different social work. However the model is based on dualism called a person and environment. They need grasp interrelation for monism between a person and environment. Therefore they have to catch the body of disabled people as the place where interaction occurs. Furthermore, to realize alternative expertise of the social work, social workers must support activities of disabled people based on the knowledge of the disabled, and form the viewpoint and the knowledge that they relatively can reflect themselves without depending on science and academic theory all the time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	1,700,000	510,000	2,210,000
平成21年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成22年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	120,000	4,600,000

研究分野：障害児・障害者福祉論、障害学

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：障害、障害者、障害者ソーシャルワーク、障害学、個人支援、社会変革

1. 研究開始当初の背景

イギリスでは障害学に基づくソーシャルワーク研究の蓄積はあるが、それは身体障害者に対するものを中心に理論化されており、知的・精神障害者に対するソーシャルワークについては不十分である。日本においては、「障害者ソーシャルワーク」の実践は見受けられるものの、それに関する研究自体があまり見かけられないという状況である。障害別に実践されているソーシャルワークを総合的に研究することを目指した理論的研究は、障害者自立支援法など新たな障害者施策の方向性に進んでいる日本の障害者福祉研究やソーシャルワーク研究を進展させていくうえで理論的研究は必要不可欠なものといえる。

2. 研究の目的

日本の障害者施策は障害別に組み立てられてきたが、障害者自立支援法に見られるように、三障害を統合した新たな体系が目指されている。これまでのソーシャルワークは障害別に展開され、「障害者ソーシャルワーク」としての一体性は乏しかった。しかし、障害者施策の三障害統合という動きの中にあっては、ソーシャルワークも障害別に分断されるのではなく、障害種別に分断されるのではなく、障害種別を超えて生活支援に貢献できるものでなくてはならない。このような問題意識にたち、この研究では、これまでの障害別のソーシャルワークの現状を比較研究によって浮かび上がらせ、さらに「障害学」の知見を援用してこれからの時代にふさわしい「障害者ソーシャルワーク」について総合的に理論化することを目的にしている。

3. 研究の方法

障害種別を超えて生活支援に貢献可能な「障害者ソーシャルワーク」理論や実践方法を明らかにするために、これまでの障害者に対するソーシャルワーク関連理論について整理、検討する。また、障害者の視点に基づいている障害学の知見を摂取して理論構築していくので、その整理、検討も行う。さらに、優れた実践現場をフィールドワークしていく。これらに基づいて障害別の成果を比較検討し、「障害者ソーシャルワーク」の理論を構築していく。

4. 研究成果

(1) 障害者に対してソーシャルワークを実践する人を「障害者ソーシャルワーカー(以下、

ワーカー)」とすることができる。ワーカーはアカデミックなレベルでは準専門職に過ぎないという結論が得られているにもかかわらず、専門職であることを主張する。その理由としてあげられるのが、自分たちの職域などを拡大しようという実利志向である。また、専門職として認められることで、世間から社会的評価を得たいということも理由となっている。しかし、専門職という存在は障害者に悪影響を及ぼすということがかなり以前から指摘されている。障害者の無力化と障害者の支配がそれである。このような問題に対して、ワーカーは一定の対応を見せてはいるが、しかし、それは自分たちのメリットを侵さない範囲でしかない。このような対応は自分たちだけのことを考えた対処方法であり、障害者のメリットなど一切考慮に入っていないものである。こういったことをし続けるのならば、障害者がワーカーに見向きをしなくなってしまうても不思議ではない。これらのことから脱却していくには、ワーカー自身が自分にとってのデメリットすら引き受けて自己変革をしていくしか道は残されていない。そうすることで、障害者と共に歩むソーシャルワークへの第一歩を踏み出すことができるのである。

(2) 現在のソーシャルワーク理論の到達点は、「交互作用モデル」である。それは、利用者とそれを取り巻く環境の交互作用に注目し、それが生じている場であるインターフェイスに介入するというものである。これにより、ソーシャルワークは医学や心理学とは異なる独自の理論を成立させたといえる。したがって、これを抛り所にしていくことが必要である。しかし、「交互作用モデル」には難点がつきまとっている。それは、利用者への働きかけに偏重して、環境に働きかけるという実践が極めて不十分となっていることである。それは、人と環境という二元論的な認識により生じてしまっているといえる。二つのものを別々にとらえるならば、その働きかける対象も別々になってしまい、従来から不得手な環境への働きかけが疎かになってしまっている。したがって、認識論として、人と環境の交互作用を一元的にとらえることが求められているのである。その際、有効となるのが、身体社会学や障害学の知見である。これらを踏まえて一元論的認識を構築してみるならば、次のようになる。すなわち、障害者とそれを取り巻く環境の交互作用とは、障害者個人の身体を舞台にして展開されているというものである。障害のある身体こそが交互作用の場であり、社会的障壁も身体を通して経験されるのである。ただ、このよう

な認識論に立ったとしても、それをどのように実践に落とししていくかという問題は残る。

(3) インペアメントを有する身体を持つ障害者と、多くの場合はインペアメントを有しない身体であるワーカーが出会い、共同していくにあたって、両者の身体の違いが大きな意味を持つてくる。それらの違いから、価値観や行動様式といった「文化」の違いが生じていくことであろう。これら異なる身体の接触は「共同の身体」を構築していく可能性が開けてくる。異なる言語が接触し合うことでクレオール化が生じることがあるように、ワーカーもクレオール化していく可能性があるということである。それにより、ワーカーは自らの「文化」にゆらぎが生まれ、相対化していく契機となるかもしれない。このような点は「障害者ソーシャルワーク」の独自性という点かもしれないものであり、今後さらなる考察が求められているといえる。

(4) ソーシャルワークはフレックスナーが示した専門職化を進めるために必須とされる事柄をまじめに実現してきた。それにもかかわらず、ソーシャルワークの専門性が疑問視されることが止まらない。フレックスナーという属性に誤りがあるので、それを書き換えなければならないとされるのかもしれないが、そのような方向に進んでも、また新たな属性の誤りが発見されるだけに終わるだろう。これでは堂々巡りの感は否めない。この堂々巡りから脱する道を考える必要がある。障害者ソーシャルワークの専門職化を進めていくには、科学やアカデミックな理論は無縁の場が存在していることに寄り添い、それを実現していくことが肝要である。つまり、専門家であるかどうかの基準を、それらに求めるのではなく、別の基準を設定し、その基準を世間に認めさせていくことである。障害者ソーシャルワークにおけるオルタナティブな専門家像を端的に示すならば次のようになるだろう。すなわち、科学化・アカデミックな理論を必ずしも求めるのではなく、経験知などに基づく障害者の自己決定を実現する、あるいは障害者の世界観に沿う実践を支えていき、ソーシャルワーカーが自分自身を相対化することのできる視点や知識を形成していくことである。これらを追求していくことで、フレックスナーの呪縛から逃れ、障害者ソーシャルワークにふさわしい人材が登場することができるようになるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 松岡克尚, 2011, 「ソーシャルワークの社会観」『ソーシャルワーク研究』36-4: 4-52. (査読なし)
- ② 松岡克尚, 2010, 「障害モデル論の変遷と今後の課題について」『関西学院大学人権研究』14: 13-33. (査読なし)
- ③ 松岡克尚, 2010, 「インペアメント文化と遊びに関する考察—身体をめぐるソーシャルワークの可能性」『人間福祉学研究』3(1): 75-90. (査読なし)
- ④ 津田英二, 2010, 「障害の問題についての当事者性は社会問題への認識とどう関わるか」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』15, 15-24. (査読あり)

〔学会発表〕(計3件)

- ① 津田英二, 2011, 韓・日発達障害人自立支援体系樹立のための共同研究、2011年韓・日学術交流シンポジウム(韓国ナザレ大学)
- ② 横須賀俊司, 2009, 日本の障害者運動における「当事者」に関する一考察、2009年韓・日国際学術大会(韓国・忠清南道庁)
- ③ 津田英二, 2009, 地域社会での障害者福祉活性化のための地方自治体の役割と課題、2009年韓・日国際学術大会(韓国・忠清南道庁)

〔図書〕(計7件)

- ① 松岡克尚、横須賀俊司編、明石書店、障害者ソーシャルワークへのアプローチ、2011、269
- ② 横須賀俊司、明石書店、障害者ソーシャルワークへのアプローチ、2011、28-54
- ③ 松岡克尚、明石書店、障害者ソーシャルワークへのアプローチ、2011、55-92
- ④ 松岡克尚、立花直樹、横須賀俊司、明石書店、障害者ソーシャルワークへのアプローチ、2011、239-264
- ⑤ 横須賀俊司編、県立広島大学、障害者ソーシャルワーク—実践からの報告(H20-22年度科研報告書)、2011、95
- ⑥ 横須賀俊司、ミネルヴァ書房、障害者に対する支援と障害者自立支援制度、2010、46-55
- ⑦ 横須賀俊司、松岡克尚、中央法規、社会福祉士相談援助演習、2009、276-281

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横須賀俊司 (YOKOSUKA SHUNJI)

県立広島大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：60304193

(2) 研究分担者

松岡克尚 (MATSUOKA KATSUHISA)

関西学院大学・人間福祉学部・准教授

研究者番号：90289330

津田英二 (TSUDA EIJI)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
准教授

研究者番号：30314454